

於ける政治の力のもつ重要性の再檢討——新らしき政治史——をわれ／＼に強く要請する。ラヴィスのこの古典的名著を読みかへすことは、この要請に對して決して無益なものではないと信ぜられる。(東京泰文社發行、四六版、二六七頁、壹圓七拾錢)(前川)

彙報

○史學研究會

例會 十月二日(十七午後一時半より文學部史學科第一教室に於いて左の講演あり、閉會四時半頃。

一、曼荼羅の表現に關する二三の見解

上野 照夫氏

(本誌本號掲載につき梗概省略)

一、わが國分寺と隋唐の佛教政策並に官寺 塚本 善隆氏

聖德太子の治國政策が、佛教を中心に、おくものであつたことは、十七條憲法が明示して居り、また隋唐にもわが遣唐使留學生が重興佛法の天子の國へ佛法を學ぶべく來たつたと記してある。かゝる治國政策は、「國家の佛教」の教化網が全國的に完全にして十分に實現されるものであり、國分寺制は畢竟かゝる制度の完成に他ならぬ。一方隋の文帝は南北朝統一の英主であつたと共に周武帝廢佛の後を承けて重興佛教を殆ど自らの使命とし、儒學を抑へて佛教を治國の中心におくが如き、支那帝王に類例をみざる興佛の國主であつた。太子の十七條憲法は帝の末年に發布せられ、

遣隋使は次の煬帝の初世に到つてゐる。太子の佛教政策は文帝のそれに深き關係があり、留學生も亦これに深き興味を以て研究し來たつたと思はれる點があり、更に州縣に僧尼兩寺を置く詔は文帝に見ることが出来る(金石文)し、帝の晩年の天下諸州に舍利を分布し塔を建てた事業は最も盛な事業であつたし、佛教徒を感化せしめたものであつた。

從來國分寺は則天武后の大雲經寺、中宗の龍興寺(中興寺)、玄宗の開元寺の模倣などと論ぜられてゐるが、その明證はない。州一官寺の考は唐の高祖にも見られ、更に高宗は乾封元年正月泰山を親祀し、天下諸州に一觀一寺をおく詔を出してゐる。高宗以來則天武后・中宗・玄宗と、歷代中央の恩威を天下に示すべき州官寺の設置が行はれてゐるのであつて、此間わが留學生學問僧が盛に彼の文物佛教を傳へてゐたのである。年次の上からは大雲經寺、龍興寺がわが國分寺の佛教々義の上に整然たる組織體系を具へたものとは格段の差がある。某寺の模倣と斷するよりは、太子の治國政策の必然の發展であり、太子以來の金光明、法華兩大乘佛典の信仰を中心とする日本國家佛教が支那に壓くり返されてゐる歴代の州官寺の制度の刺戟を蒙り乍ら成長し、大化改新の中央集權成り奈良貧窶なりし後に、金光明護國之寺、法華滅罪之寺として、全國佛教々化網を成就したものと考へられる。此意味に於いて、隋文帝の佛教治國政策をその源流に忘れてはならぬと思ふ云々。

(東洋史研究より轉載)

大會 十一月二十一日(日)に昭和十二年度本會を開催、午前九

時より正午まで、洛西の名刹、仁和寺及龍安寺を見學。仁和寺寶物館においては、同寺所藏の名寶七十餘點を特に展觀。龍安寺にては、その著名な庭園を前に、紅葉濃き秋色を賞でつゝ、茶庭に列し、什寶十數點を見學、來會者多數にのほり盛會、當日日本會では特に詳細な解説を附した特別展觀目錄(圖版入)を作成し、會員に贈呈、見學の便とした、尙當日兩寺にて特に展觀せられたるものを同目錄中より抄出すれば大要左の如くである。(解説略)

仁和寺藏

御宸翰

- 一、高倉天皇宸翰御消息 一通
- 一、後嵯峨天皇宸翰御消息(國寶) 一通
- 一、後宇多天皇宸翰御消息(國寶) 一通
- 一、後醍醐天皇宸翰御消息 一通
- 一、靈元天皇宸翰懷紙 一幅
- 一、櫻町天皇宸筆般若心經(國寶) 一卷
- 一、光格天皇宸筆濟仁親王御書繼藥師經(國寶) 一卷

繪畫

- 一、孔雀明王像(國寶) 一幅
- 一、聖德太子像(國寶) 一幅
- 一、別尊雜記(國寶) 五十七卷

彫刻

- 一、吉祥天立像(國寶) 一軀
- 一、增長天多聞天立像(國寶) 二軀
- 一、文殊菩薩坐像(國寶) 一軀
- 一、聖德太子坐像(國寶) 一軀
- 一、愛染明王坐像(國寶) 一軀

工藝品

- 一、唐草蒔繪寶珠宮(國寶) 一箇
- 一、銅製佛具(國寶) 五箇

文書、典籍

- 一、聖教三十帖策子(國寶) 三十帖
- 一、尊勝陀羅尼梵字經(國寶) 一帖
- 一、大乘五蘊論卷第一 一卷
- 一、大教王經卷第三 一卷(三卷の内)
- 一、妙法蓮華經 八卷
- 一、消息 高野御室消息・華藏院宮法(國寶) 一卷
- 一、消息 印消息各一通 返事案二通(國寶)
- 一、孔雀明王同經壇具等相承起請文(國寶) 一卷
- 一、醫心方(國寶) 五帖
- 一、目錄(斷簡) 一卷
- 一、般若經理趣品(國寶) 一卷

一、承久三年同四年日次記(國寶)	一卷	一、觀音授記經	一卷
一、後鳥羽天皇御作無常講式(國寶)	一卷	一、三十帖策子子細	一卷
一、千手陀羅尼	一卷	一、不空三藏筆梵字經	一卷
一、御室相承記(國寶)	六卷	一、覺佛法親玉願文	一卷
一、弘法大師御遺告	一帖	一、醍醐僧正勝賢消息	二通
一、黃帝內經明堂太素(國寶)	二十六卷	一、鎌倉幕府下知狀	二通
一、眞光院禪助消息	一卷	一、忍頂寺關係文書	二通
一、龜山院御灌頂記	一卷	一、行遍大僧正消息	一通
一、信助僧都灌頂記	一卷	一、三代御置文	一通
一、禪圓阿闍梨入壇記	一卷	一、顯助請文	一通
一、御系圖(斷簡)	一枚	一、雜訴法	一卷
一、中院流源氏系圖(斷簡)	一卷	一、道意僧正日次記	一卷
一、傳流抄	十帖	一、素間靈樞殘篇	一卷
一、天照大神口決	一帖	一、長者補任記	一卷
一、皇帝紀抄	一冊	一、行基菩薩地圖	一枚
一、天祈講式	一卷	一、明惠上人御廟圖	一枚
一、仁王經御修法次第私	一帖	一、梅尾石水院差圖	一枚
出 土 品		一、貞觀寺文書	一帖
一、銅版經文、金銅輪寶	一箇、一箇	一、不灌命等記	一帖
一、黃金、銀、白瓷盒子	各一合	一、金剛愛染菩薩	一帖
一、青瓷盒子	各一合	一、七三十八日祕記	一卷
尙 所 他	二合	一、守覺法親玉消息	一卷
		一、廢太子	一通

一、興福寺學侶事書

龍安寺藏

繪 畫

- 一、無因和尚像 絹本着色
- 一、日峯和尚像 絹本着色
- 一、特芳和尚像 絹本着色
- 一、大休和尚像 絹本着色
- 一、雪江和尚像 絹本着色

典 籍

一、太平記(國寶)

十二冊

次で午後一時より京都帝國大學樂友會館講堂にて公開講演會を開き、左の三氏の講演あり、來會者堂に滿つるの盛會にして、その間恒例により評議員選舉を行ふ。その結果全員留任となる、會務報告後講演會を閉ち、引續き同所に於いて晚餐會、懇話會を催す、出席者約四十名、午後九時頃散會。

一、梁戸 敬

本學助教 文學士 那波 利貞氏

英佛兩國に珍藏せられる世界的靈寶たる燉煌發見史料の中に、古佚書の舊寫本や、傳世書の古鈔や學界未知の書が豊富に遺存して居つて、此の點に於て甚だ貴重視すべきものなることは、此の約三十年間に幾多の先輩學者の夙に指摘紹介研究する所であるが、私の觀る所を以てすると、然らざる民間の雜文書も前者同等の絶

一通

- 一 一幅
- 一 一幅
- 一 一幅
- 一 一幅

大なる史料的价值を有し、しかも之は其の性質が多種で、以て唐五代時代の民間の生活狀態などを知ることの出来るものが多いと思ふ。此の所謂雜文書の紹介研究利用は從來あまり爲されて居らず僅かに我國に於て仁井田隆博士の『唐宋法律文書の研究』や玉井是博學士の『支那西陲出土の契』や中華民國の王重民君の『金山國際事拾零』などにて少しく試みられたるに過ぎぬ。私が茲に述べむとする演題も實は此の雜文書の中に散見するもので、從來全然學界に知られないことであり、此等唐宋・五代初期の頃の燉煌發見雜文書を詳細に調査したればこそ、僅にその一端なれども、從來の書籍上にて全然傳らぬ往昔の庶民生活上に於ける一新事實を探知し得たのである。佛國第五五貳貳號文書四種中の第四種なる『梁戸史汜三履朴願弘弟願長契文』に見える梁戸は、これのみにては其の何たるかを知り得ず、梁の義なる橋梁・屋材などの意を以て解し得ざるものと思はれる。また佛國第參參五貳號紙背の『三界寺招提司法松財』なる文書、同第貳〇四九號紙背の『淨土寺直歲保護手下出現破除曆』『淨土寺直歲願蓮手下出現破除曆』同第參貳〇七號の『安國寺上座勝淨等手下入破曆』など燉煌地方の寺院の會計出納報告書にして、同光三年・長興二年・光啓二年などの年紀明なる唐宋・五代初期の文書に梁課なる語が寺院收入目の一として出て居るが、此の梁課は必らずや梁戸と關係あるに相違なく、此の梁の意は特殊のものなるに相違ない。しかし梁戸・梁課は、私の窺聞なる、未だ書籍上に寓目したることなく、又和漢の先輩學者の之を指摘したる人あるを聞かぬ。今之を當時の民間文書た

る熾燿發見の雜文書の中に探ると、佛國第貳〇參貳號紙背の『甲辰年一月巳（後）直歲惠安手下諸色入破曆』の中に椽梁子・椽子辰・椽子・梁子の名が習見し、これが梁戸・梁課と關係あることが想像せられる。然らば梁子・椽子とは何物なるかと、謂ふと佛國第貳〇參貳號紙背の『淨土寺西倉願勝廣進等手下入破曆』に油梁・油梁子として見えるもので、結局梁子とは製油設備の樑木・油木・長木の意なることが知れ、梁戸は製油戸・梁課は製油税と解せられ、當時淨土寺・三界寺・安國寺等の莊園の小作人並に寺に特別關係ある人の戸に梁戸なるものがあり、寺院が之を管轄支配し、而して其の油梁子による製油設備の施設、修繕の費はすべて所管寺院にて負擔し、一寺所屬の各梁戸は梁の借用料即ち製油特權免許權の意にて梁戸團體と寺院との關係にて毎年一定量の現油を梁課として寺院に納貢したことが知れる。淨土寺の例で謂ふと梁課は年額三碩の油と二十七枚の査即ち油槽である。

之に對して參考となるは我が鎌倉室町時代に於ける岩清水八幡神祠と大山崎神人との八幡宮内殿用燈油備進を以て生じて居つた關係であつて、八幡神祠の勢力を背景として大山崎神人は油販賣の特權を享受したのである。八幡神祠の場合には内殿用燈油、以外に賣油利益の一部をば八幡神祠に納貢したと察せられるが、『離宮入幡宮文書』の上では確證が上らぬ。然るに熾燿史料の方にては其の確證がある。淨土寺の例を以てすれば、その所管梁戸は少くとも十六七戸あり、寺の年額梁課は三碩の油なれば、こは各梁戸が資本を投じて盛に製油して民間に販賣したるに相違なく、其の賣

油特權免許の報酬としては淨土寺へは油ならざる他の麥粟布帛綿豆などにて納入したるもので、之を證據だつる貴重な記載は佛國第貳〇四九號紙背の『淨土寺直歲願進手下入破曆』に布伍拾尺梁戸郭懷義折油入、龜澤貳拾肆尺梁戸郭懷義折油入とありて、しかも其の年の淨土寺收入の梁課の現油はそれだけ減額されてあらば、寧ろ他の原因より少量増量となり、布縹の條にも右の伍拾尺・貳拾肆尺が加算されてある。これ明に淨土寺の梁戸なる郭懷義が梁課の分擔額以外に賣油免許税として布縹を以て油に代へて納入したる確證で、此の一例を以て一般を推知するに足りる。而して賣油免許税は所管寺院と所屬各梁戸との純粹個別的關係にて納入したと思はれる。此の頃の史料に依れば寺院にて燈用食用に油の需要缺くべからざるものなりしのみならず、民間にても燈食用の需要多く、賣油商人、賣油仲買商人のありしこと『隋唐志話』『酉陽雜俎』『北夢遺言』等に散見し梁戸の民間に販賣せし油量は相當額なりしを知るべきであり、かくて梁戸は所屬の寺院の特權權力にて其の地位を保護せられて開業者の輩出を防止し得、寺院は梁課と賣油免許税を獲得して相互的共存共榮の關係にありし譯である。中晚唐五代の巨寺大刹が特殊權力を有せしことは周知の通であるが佛國第貳壹八七號なる『寺院特殊權力擁護宣言』とも謂ふべきものにして當時流行の俗講の席にて聽衆に告げたる珍らしき史料によれば、地方行政官の行政權執行に牽制を加へ、寺院所屬の人は地方行政官の支配する戸と別箇の社會を形成し、嫁娶すらその社會内にて行はしめ、一種の治外法權の如き實情であつたら

しく、此の事は從來あまり論證されて居らぬことでこれまた珍らしいことと思はれるが、斯かる特殊權力あればこそ、その所屬の戸がその背景を負ひて大山崎神人同様に製油賣油特權を以て地方的に雄長し得たのである。しかも此の現象は檄燻地方の特殊現象には非ずして中原の巨寺大刹でも存したと想はれるが、之が文獻上に見えぬのは稱呼を異にしたとも見られる。また寺志類に法産、莊産、寺産、田園志、版籍などの一項はあるも、これは所有財産の記載で、碾磑、油梁、高利貸の如き寺院の營利なる裏面的事情は寺志にて發表を憚り、また發表し難いことであるから、此の梁戸制が寺志類に現はれぬとも解し得る。斯かることは寺院の直歲曆の出現破除曆を待たざれば知り得ざることで、しかも唐五代の此の種の文書は今全く傳らぬ。檄燻文書中に幸に此の種の文書ありて之を知り得たのであるが、これは檄燻地方の特殊現象とは考へられぬ。攻究の結果は八幡神祠と大山崎神人との關係に類し別に珍らしく新しいことに見えぬが、我が國史上に於てこそ珍らしくからざれども、支那寺院經濟史上に於ては從來全く學界に知られなかつた一新事實で、支那社會史的にも經濟史的にも地方行政史的にも甚だ重要な研究問題ならむと考へられる云々。

一、佛蘭西史學史に於ける中世研究の意義

九州帝大教授
文學博士 長 壽吉氏

(本誌掲載の豫定につき、梗概省略)

一、東西本願寺の分立

東京帝大教授
文學博士 辻 善之助氏

(本誌掲載の豫定につき梗概省略)
終りに、本會に對し種々の御便宜を與へられた仁和寺及龍安寺當局に深厚の謝意を表すると共に、特別展覽日録編纂の事に専らあたられた赤松俊秀、時野谷勝兩氏等に深謝する次第である。

○東洋史談話會

第二回大會

東洋史談話會本年度大會は豫定の通り十一月二十三日(新嘗祭々日)午後一時半より、京郷帝大樂友會館講堂に於て開催、左の講演があつた。東京、東北、九州其他各地より専攻家參集出席者約七十名に達した。尙、同日七時より引き續き同館に於て晚餐親會があつた。

大明一統志に就いて

宋代の皇城司に就て

西人の觀たる元大都

寧古塔貝勒に就いて

遼朝徙民政策と州縣制の成立

札(札)軍と成吉思汗

清初の旗地に關する滿文老檔の記事

羅越國問題の補遺

清朝堂子の由來

日比野丈夫氏
佐伯 富氏
藤枝 晃氏
今西 春秋氏
田村 實造氏
駒井 義明氏
鴛淵 一氏
杉本直治郎氏
井上以智爲氏

○東方文化學院京都研究所

開所第九周年記念講演會

十一月二十日午後二時より同所講演場にて開催、左の講演があった。

舊鈔本禮記正義を校勘して 研究員 吉川幸次郎氏

支那詔勅と其起草者 評議員 鈴木 虎雄氏

尚、當日は午前午後を通じて所内の開放あり、紹興出土古鏡の陳列展観があつた。

○支那學會記事

十一月例会 十一月十三日(土)午後一時より文學部第一講習室にて開催。來會者二十名。

一、支那に於ける君權強化思想の展開 重澤 俊郎氏

一、室町時代の抄物に就いて 三ヶ尻 浩氏

—漢文和讀史の一節—

本年度大會 十一月二十一日(日)午後一時より文學部第八教室にて開催。來會者約百名。

一、文選集註に就いて 廣島文理大助教授 文學士 斯波 六郎氏

一、支那古代文化の象徴性 三高教授 文學士 佐藤 廣治氏

一、王安石内政總考 東北帝大教授 文學博士 岡崎 文夫氏

○地理學談話會

○地理學談話會例會

十月二日・後二時より、於地理學實習室

一、出雲の製鐵業 二回生 並河 由則君

一、等時刻線圖に就て 出席者二十四名 今村新太郎君

出席者二十四名

○第五回地理學談話會大會

十一月二十三日・午前九時—正午、於樂友會館

一、閉會の辭 藤田 元春

一、廣島附近の石器時代に對する先史地理學的疑問 神尾 明正

一、大都市附近の交通に就て 今村 新太郎

一、地理學に於る環境の意義 松井 武敏

一、江南の地形と聚落 米倉 二郎

一、奈良盆地の民屋—大和棟は大陸文化の遺物也 島 之夫

一、冷水峠の交通地理 瀧本 貞一

一、近江八幡町の古水道とその地理學的意義 吉田 敬市

一、黃 河 藤田 元春

一、盆地性より見たる近江の聚落 田中 秀作

一、漫談—戦争から見た地理 小川 琢治

一、閉會の辭 小牧 實繁

神尾明區氏は廣島附近石器時代貝塚に就てその遷移せるものと然らざるものとを區別し、併して地殼運動・洪水・海面の昇降に及び廣島附近の先史時代地表に一瞥を授ず。

今村太郎氏都市の人口増大とそれに伴ふ交通機關兩者間の關係を東京市を例として論ず。

松井武繁氏近時思想界に於る環境概念の再生を述べ地理學に於るこれが解明に對する不當なる輕視を拒け、こゝにこそ生くべき道を求むべきを強調し次で環境概念を論ず。

米倉二郎氏江南三角洲の發生を揚子江の沖積作用と杭州灣及揚子江口の潮流及潮汐より説明し次でクリークの發生を自然水路と深・匯、漢吳晉代の開發等によつて述べ莊宅・市鎮・城等にも及ぶ。島之夫氏は奈良盆地に於て大和棟なる建築用式の存在に對する説明を建築用材に求むることを不可なりとし、臺灣より支那に溯及してその淵源を求むるを可とせずと推す。

瀧本貞一氏筑前冷水通の參觀交替路として生じてより交通路としての消長について論ず。

吉田敬市氏、近江八幡町には二百五十年前秀次の時代に由來するとされる原始的な水道が存する。郊外のやゝ高き所に井戸を掘り桶を埋めて水源として竹樋を以て給水する設備であるが、之は町の西半は土質が粘土で「かな氣」を含む爲め井水を利用出来ぬ爲に設けられたもので、東半は砂利層である爲掘抜井戸を用ふ。

藤田元春氏、黃河のデルタ及びその河道の變遷よりその治水策の攻究は吾人の任務なるに至る。

田中秀作氏、近江盆地に於る聚落の概觀、その聚落の密度は山地より低地向つて漸時増大するが湖東地方では湖岸に接する部分は却つて稀薄である。聚落の排列も私領・莊園・市城・城等の現在

聚落への發達。

○地理學教室秋季旅行

小牧助教指導、助手及二回生四名

十二月十二日 京都發、豊橋經田飯田着、同地投宿。

十三日 辰野を輾、上諏訪に至る、宿。

十四日 小海線經由清里・小諸を經別所泊。

十五日 長野野尻・柏原巡檢赤倉泊。

十六日 北陸・中央・東海道各線を利し夫々歸京。

○西洋史讀書會

例會 昭和十二年度第三回例會は拾月二日午後六時より樂友會館第五號室にて開催、左記二君の讀書紹介並びに研究發表ありて九時頃散會。出席者は、原教授、鈴木・井上講師をはじめ二十一名。

一、Max Weber に就いて

二回生 笹川 新一君
二回生 辻本 倉雄君

政治的小傳(主として「*Lebens*」による)及び主要著作論文を簡單に前述して後、彼の抱く實際政治的思想の一端を窺ふべくその政治論文の一にして一八九五年 Freiburg に「*なやめられたる彼の Akademische Antrittsrede über Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik*」の内容を紹介した。

此の論文に於て彼の企てる所のは、生存の爲の經濟闘争に於ける國民性間の肉體的及び精神的種族差別が演ずる所の役割を

例示によつて具體化せんとすることであり、従つて國民性に基礎を置く國家本質の設置に關する吟味觀察をば國民經濟政策的吟味觀察なる枠に結ばんとするのである。故に彼は Osmarken に於ける Deutschland と Polentum との問題を取り上げ、之等の事實を出發點として國民經濟政策を説き、國民國家なるものは國家の世界的權力機能であり之に於ては國民經濟的觀察の最後の價值標準は國家理性であると述べ、或は又今後獨逸の政治的指導者は何處の層より來るべきか等の興味深き問題をも取扱つてゐる。

(以上笹川)

彼は先づ Typen der Herrschaft を Ideal Typus の一例として擧げて Max Weber が如何なる方法で Ideal Typus を設定したかを述べ併せて Ideal Typus の如何なるものなるかを論述した。而して結論として勿論歴史は Tatsachen の連続ではあるが然し Ideal Typus の設定は Erkenntnistheoretische Mittel として方法論的には不可缺のものであり、これに依りて始めて歴史は學的統一が完成するのである。即ち彼の企てんとした所は歴史事實の連続性の中に意味的内容的な切斷面を設けて、歴史現象を把握せんとしたのである。(以上辻本)。

大會 第五回西洋史讀書會大會は特に原勝郎、坂口昂、植村清之助、中村善太郎諸先生の追憶をも兼ねて十二年十月廿四日午前十時より擧行せられた。

(一) 追憶法要 於百萬遍本堂

遙々御來會下さつた物故四恩師の御遺族を始め、濱田耕作、高瀬武次郎、松本文三郎、朝永三十郎、小島祐馬、大類伸諸先生及び卒業生五十餘名參列、式は盛大を極めた。

(二) 講演會 於樂友會館

一、開會の辭

二、セバステの墓の四十殉教軍人崇敬の歴史に就て

水川 温二氏

三、合衆國獨立以後の英米關係

坂口先生の著書を読みて 森 瑞樹氏

四、イスラエル文化宗教史上に於けるエゼキエルの位置

中原與茂九郎氏

六、ディオニソス精神 原 隨園先生

七、神聖同盟とジェズイット教團 時野谷常三郎先生

八、閉會の辭

恒例の講演會は先づ、時野谷、原先生の開會の辭に始り御講演をお願ひした各氏は右の演題のもとに日頃御研鑽の一端を發表せられた。

なほ講演會場には物故四恩師の御肖像、書簡、軸物、學位論文原稿、ノート、著作、等多數陳列せられ我國に於ける西洋史學開拓の御努力の成果に心からの感謝を捧げたのである。

續いて六時より晚餐會、懇話會を開く。

こゝにも御遺族の御出席を得て、諸恩師の追憶談に盡きぬ歡を發して午後九時散會こゝに本年度大會を意義深く終つた。

例會 昭和十二年度第四回例會は十二月十日午後六時より樂友會館第六號室にて開催、左記二君の讀書紹介及び研究發表ありて九時頃散會。出席者は、原教授、鈴木・井上兩講師を始め、二十名。

1. Les caractères généraux de l'histoire économique de la France du milieu du XVII^e Siècle à la fin du XVIII^e Siècle. Par H. Hauser

二回生 豊田 鏡君

(内容梗概) オーゼールはル・グラン・バルチの瓦解による財政危機の出現と、之の影響の下に興亡した各社會階級、深刻された經濟的性格、商工業の發展を説き、次に農業を無視したるコルベールの財政々策に工業の發展と並びに國庫窮乏之源を求め、ジョーロの銀行破産も結局は商工業を躍進せしめた事を論じてゐる。更に農業は獨り進歩に遅れ、小土地所有者なる農民の重き負擔と、之から免れんとする強き願望、新興貴族の飽くなき權利の追求は農民革命を不可避たらしめた。而しその革命の一七八九年の破裂は財政問題をまつて始めて説明される事を強調する。以上の如く終始一貫財政を中心として十六世紀の中葉にその初幕を大革命にその終幕を持つ經濟劇の展開を爲しその間強くその經濟的特徴を描き出さんとした努力を認めるのである。

1. Apollon Sminthens (鼠の神アポロン)の崇拜に就いて

文學士 吉原 好人君

小亜細亞の西部海岸及びその附近の島嶼、特にトロアス地方に

於ける原住民に信仰せられてゐたスミントス(鼠)の崇拜が、遅れて殖民し來つた希臘人の一派アエオリヤ人の崇拜せるアポロンの崇拜に抱擁せられて、アポロン・スミンテウスの崇拜となつたことを説く。

○考古學談話會

昭和十二年度第二回考古學談話會

十二月十日午後二時半より考古學實習室にて開く。教室議員の外濱田總長初め小牧博士、三宅醫學部講師、長廣、山口等の先輩來會、すべて二十五名に上り盛會であつた。講演は末永雅雄氏の滿蒙旅行談よりはじまる。今年の六月東亞考古學會の滿洲調査隊に參加調査した際の所見のうち瀋平の左岸の道を切り開いた所で見出した漢瓦の遺蹟や、元の上都の調査等を其の地の風物と併せて興味深く説かれた。岡田芳三郎氏は「唐氏の天尊像に就いて」と題して研究室所藏の唐開元の銘ある天尊像に就いての調査の結果を述べて、美術的價値に及び、其の銘文よりして、道家の人の供養の爲のものなる事、其の文化の中心に近き所に於て作成された事等を説いた。

次の中村清見氏の演題は「遺物の性格論」であつて、考古學的考察に於ける遺物のもつ一般的な性質をロジカルな方法で説かうとしたのであるが、時間の都合上其の考察の最後の段階までに達しなかつた。氏の論じた遺物の實年代、其他に就いて梅原、長廣兩氏の意見の開陳があつて後、鐙方貞亮氏は「南鮮の古代農耕」と

題して麥、豆、稻等に關して、考古學資料及び文獻によつて論じ農具に及び最後に土地の所有、生産關係にも觸れた。

水野講師は「辟邪雙目」と題して、漢氏の辟邪獸、天祿（或は天祥）獸に關して文獻及び現存の遺物等より其の意味を論じ先秦銅器の綵鑿紋との關係に及んだ。因に氏の辟邪獸は消極的に邪をさける意味であり、天祿は積極的に天祐を祈願するものであるとした。

能勢丑三氏は「吉野人丸塚の塔柁及び四佛像」に就いて此れまでの奈良時代とせられた右の遺物を様式上其の他より訂正して平安朝時代のものとなし、もと十三重の塔の一部であつたこと、なほ四佛が密教的手法をもつて描かれた珍しいものであるとした。最後に梅原助教は「漢代の植物文様」に就いて「ノイシウラ出土の漢氏の織物の唐草模様を紹介して其の極めてギリシヤ的手法と相似することから當代の植物文の原流に及ぶ所あつた。

考古學教室年曆 (昭和十二年)

昭和十二年考古學教室に行はれたる活動次の如し、
 昨昭和十一年末より三月末日に至る間大和國磯城郡川東村唐古池の發掘より、末永雅雄氏主査とし、随時教室員學生等参加す。

(概報本誌一七一頁)

二月十五日、學術振興會總裁秩父宮殿下本教室御成り、濱田教授の御説明にて教室陳列室御巡視。此月、古文化研究所報第四冊として、梅原助教はじめ教室關係者の從事せる「近畿古墳臺

の調査」第二發行。

四月より新に水野清一學士に講師を依頼し、「北方亞細亞考古學」開講。

五月十八日、同講師及び新二回生(岡崎、松田二君)の歓迎會あり。中甸小林助手等大阪府桑津の石器時代遺蹟調査。同下旬、濱田教授、梅原助教、朝鮮寶物古蹟考古勝天然記念物調査保存委員會出席の爲渡鮮。此月二回梅原助教の實習旅行あり。

六月より七月に亘り末永氏東亞考古學會本年度の滿蒙調査旅行に參す。

七月、教授濱田耕作先生、京都帝國大學總長となられ教室を去らる。教室の爲最も惜むべしとなす。教授羽田亨先生教室主任とならる。此月より八月に亘り大阪府にて府下豊中南天平塚古墳調査、梅原助教教室員参加。

九月、此月以後醫學部教授清野謙次博士考古學講讀を擔當せらる。講讀書 Das Urbild

十月、濱田先生の「大和島庄石舞臺の巨石古墳」本教室報告第十四冊として刊行。此月梅原助教考古學講座分擔發令あり。四日、大學院學生今井富士雄君出征。同十六日獨逸博物館總長キュンメル博士來學。此月末小林助手等和歌山縣西牟婁郡芳養石器時代遺蹟調査。

十一月、金關丈夫講師の「人類學」短期講義あり。同二日金關講師歡迎の爲に考古學談話會を人類學會と合同の下に行ふ。(詳報本誌一九九頁)。

十二月十日、再び考古學談話會を行ふ。(詳報本誌 頁) (中村)
教室關係著書如次——

梅原一、『近畿地方古墳墓の調査』一、『金村古墳叢英』

濱田一、『大和島庄石舞臺の巨石古墳』京都帝國大學文學部考古
學研究報告第十四册

水野、長廣、『響堂山石窟』

(第二學期第一回)考古學談話會

人類學會と合同にて十一月二日午後六時より樂友會館にて、金
關講師歡迎を兼ねて行ふ。集るもの小牧、梅原、兩助教、金關、
三宅兩講師以下廿二名、二回生岡崎君の司會の下に、梅原助教
の挨拶あり、藤岡謙二郎は「過去一世紀の歐洲石器時代考古學」と
題し、トムゼン、ブーンエー・ド・ペルト出現以後の石器時代研
究の方向を概括し、鶴田忠正君は「銅鐸繪畫の一考察」と題して特
に銅鐸繪畫のリズムのもつ性質を論じ原始文化研究の一方を述
ぶ。この問題參加者の注意よりそれに就いて活潑なる論議行はる。

次に角田文衛君は「國分寺の佛像」と題して、文獻のたくみな利用
から之を論じ、小林行雄氏は「田邊灣周辺の古墳時代末期の遺跡」
に於いて新に見出されたる洞窟出土の遺物が奈良朝のものなるを
述べ、その地形立地より漁村文化と關係あるべきを推し、また岡山
縣のもの、關係に論及した。金關講師は「臺灣における本島人洗
骨に就いて」として、實物頭蓋を見せ、その洗骨に到る過程と骨
にあらはれる特色を興味深く説明する所あつた。梅原助教は
「輯安縣における本年度發掘に就いて」それを實見した藤田城大

教授の談を紹介し、閉會の挨拶とした。(藤岡)

○讀 史 會

昭和十年度第二回讀史會例會

讀史會例會は十月十四日午後七時より樂友會館に開催された。
本年度第二回の會合である。恰かも秋季見學旅行出發の前々日、
然も本曜日と云ふ甚だ條件の香んばしからぬ日柄であつたにも不
拘、柴田先生をはじめ先輩十八名、學生十六名、合計三十五名の
來會を得た事は望外の悦びであつた。

因みに當日の研究發表者並に講師氏名は左の通りであつた。

1、周防國分寺に就いて 國史二回生 弘津 徳君

2、伽藍に於ける神 國史二回生 五來 重君

3、長州諸陰の成立と崩壞——幕末に於ける軍事問題 國史三回生 小野 義彦君

特別講演 甲賀寺と近江國分寺の問題 柴田 實先生

昭和十二年度大會 十一月二十日(土)午後一時より樂友會館に
於て、福尾猛一郎氏司會の下に閉會。午後五時半盛會裡に閉會し
た。當日の演題及講演者は左の如くである。

開會の辭 藤 直幹氏

高野聖に就いて 石田 秀文氏

遍照光寺本神皇正統記の性質 木村 武夫氏

高木 神 勝谷 透氏

三浦梅園の思想

莊園と村落の關係

安居院の神道集に就いて

神社鎮座に就いての一考察

閉會の辭

○民俗學會

例會 十一月五日夕六時より於樂友會館

奥淨瑠璃と義經記

精進塚に就いて

岡見 正雄氏
井上 頼壽氏

○第二回神道史資料展觀

文學部國史研究室に於ては、一昨昭和十一年十一月始めて神道史に關する資料の展觀を行ひ之を公開して廣く世人の關心を喚起したく同學の士の歡迎を博したが、昨十二年にも十一月二十、二十一、二十二の三日間陳列館階上に於いて第二回展觀を開催した。恰も史學研究會、讀史會等諸學會の大會と期を同じうした爲、地方よりの參觀者も多く連日盛況を呈した。前回の展觀が主として神祇並に神道思想史に關する著書を蒐めたに對し、今回は特に神社及びこれが祭祀、崇信に關する資料を主眼とし、まづ第一部神社に關しては更に之を社殿、社地、社領の三類に分ち、第二部の祭祀はまた祈願、祭典及び行事の三類に、第三部の崇信は神人及社人と一般崇信の二類に之を分つてその資料を蒐集し陳列した。今その主要なるものを擧ぐるにまづ第一部の甲類、社殿に關して

は寛正の内宮遷宮日記(二册)、應永の外宮御正殿御庭作記(一册)(共に三重御巫清白氏藏)等神宮の御遷宮に關するものを筆頭に談山神社藏の永祿二年の建築細部指圖(一通)、永正六年の大講堂造營支度注文(一通)以下春日神社藏の弘安八年の春日御造營記(一帖)、松尾神社藏の春日神社應永十四年遷宮記録(二卷)等京畿諸大社の多く室町より江戸初期にかけての造營に關する記録差圖等を主とした中に、山城上狛高神社の所藏に係る文永八年の造營記以下數卷の記録は非常にめづらしいものであつた。神社の古圖としては氣比、日吉、大神、牧岡、離宮八幡等數多く、その大幅を以て各陳列室の壁面を飾つたが、中にも近江多賀神社の古圖と攝津丹生神社一山之圖とは、第三部一般崇信の圖に加へられた神宮徴古館藏の參宮曼荼羅と全くその圖様を同じくし、單なる實用的の目的以外に一種の曼荼羅として描かれたものと考へられ、その思想的意味の故に特に興味を惹いた。更に特殊なものとしては奈良藥師寺の道馬權現神像御覆(一個)、休ヶ丘八幡宮の神座並神寶(計二十六點)及び山城周山矢代日吉神社の隨身像二懸等が異彩を放つた。乙類社地に屬するものは松尾、今宮、上御靈、八坂、六孫王、稻荷、住吉、開口等の境内圖を主たるものとし、丙類社領としては神宮御厨を始め八坂、松尾、梅宮、稻荷、若宮八幡、新熊野等の社領莊園に關する文書が主たる部分を占めた。就中御巫清白氏の所藏にかゝる寛弘七年二月五日石部千吉解以下數通の文書はいづれも伊勢二見にある御靈殿に關するもの、殆ど全部平安朝の年記を有し頗る稀觀のものとしてせられた。尙この部に屬する

繪圖として唯一つ東唯一氏の出陳になる松尾社領東郷庄繪圖は裏に正嘉二年十一月日の下知狀があり、表は比較的正確に寫された東郷庄全領域の所々に朱線を引いて證判をなし、領家地頭折半の狀を明確に圖示せるもの、蓋し中世の莊園研究にとつて類例少き好資料といふべきであらう。

第二部に於てはまづ甲類祈願に關するものとして水無瀬宮所藏後村上天皇宸翰(二通)並に土橋嘉兵衛氏所藏慈圓僧正自筆祈願敬白文(一幅)合せて二點の國費の外藩贈伊和神社所藏新田義貞寄進狀の如きも亦少少義貞の眞跡を傳ふるものとして優に國寶に准ずべきものと考へられた。その他に於ては大阪坐摩神社所藏の孝明天皇靈夷降服の御祈願文(二通)、同じく明治天皇御降誕書類(六通)の如く皇室よりの御祈願に關するもの、水無瀬宮並に多田神社に藏せられる足利歴代將軍の祈願文、多賀稻荷等に於ける豊臣秀吉の大政所病氣平癒に就ての祈願文等が見るべきものであつた。乙類祭典に關するものとしては上御靈神社の祭禮日取に關する後陽成天皇女房奉書並に前田玄以奉書(各一卷)其他の文書類より熱田、賀茂、春日、津市八幡、名古屋洲崎神社、津島神社等の諸祭禮繪卷の類がその華麗なる色彩によつて人目を引き、又稻荷春日賀茂等の諸社より出陳された多數の祭具祭器の類、並に冷泉伯爵家の小忌の如きは文字通り百聞の一見に及ばざることを感ぜしめた。丙類行事に關するものとしては近江御上神社の三上若宮神事年代書(二卷)並に御神事帳(一册)が共に永祿よりの書繼たるを始め東氏所藏の松尾神社いかりの神事註文(二通)が寛正の年

記を有するなど少數ながら普通たゞ口頭の傳承によつて傳へられる民間の神事が記録の上に於ても確實にその古きを立證しうるこの例となすべきものがあつた。

第三部崇信の中に屬するものは、まづ甲類神人及社人に關するものとして東氏所藏文書の中より松尾社々家泰氏に因んで多數の平安朝の文書が選ばれた外、祇園の舊社家納徳之助の所有になる神樂座中提寫(一卷)や、近江建部神社の弓座記録等は神事奉仕の座のことに關し、雖宮八幡宮の大山崎神人文書、御上神社の三上社供御御筭關係文書等は神人の經濟的活動を徵見すべき代表的資料であり、從來その名のみ高くして何人も容易に見られなかつた今堀日吉神社文書が數點ながら近江得珍保の座人に因んで出陳せられたことも特筆せらるべきであらう。最後に乙類一般崇信に關するものとしては經無量壽院住侶良恩の筆になる弘安九年の太神宮參詣記を始め神宮崇信に關するものが多く、他社のものとしては西宮吉井太郎氏出陳品の中大般若經の奥書に建久五年五月九日より十一日に至る三箇日が西宮參詣日なるによつてそこに詣る船中に於て書寫せることを記せるものが注意を惹き、その他では芦雪の筆になる稻荷神社の繪馬外數點の小繪馬類を擧げるばかりである。

以上その名を掲げたものは全出陳品中の十一にも達せず、その他に於ても注意すべき資料は少くなかつたが、紙面の制限の故にすべて割愛する。(柴田)

京都帝國大學 鎌倉東京佐渡地方研究旅行記
國史專攻學生

昭和十二年十月十六日夜 京都驛發。おどろくと駒踏みならせし瀬田橋も、慣れぬ寢床に身を横へつゝ渡る。その推移の跡を辿るべく、鎌倉東京佐渡見學旅行を企つ。行する者西田先生以下二十五名。

第一日(十七日) 圓覺寺、建長寺、鶴岡八幡宮、國寶館、鎌倉宮、瑞泉院、金澤文庫。

先づ歩を移して圓覺寺に至る。構造緻密なる舍利殿南宋禪宗建築を寫して清楚な感を與へる。内に入りて須彌壇一基各部の比例整ひて透彫の朱緑の牡丹花一抹の妍麗を添ふ。佛光國師坐像(木造)は、その眞學な相貌に、作者刀技の牙えを仰ぐ。一光三尊の阿彌陀如來兩脇侍立像(銅造)鎌倉時代善光寺如來尊像の流行を物語る。虚空藏菩薩像、羅漢像佛光禪師像(以上絹本着色)の諸畫幅に眼を驚かせば、延慶元年十二月二十三日の太政官符宣、乾元二年二月十二日の圓覺寺制符條々亦研學に資す。道を建長寺にとる。やがて堂宇聳立す。本堂細部に互りて江戸初期の奢麗なる裝飾を纏ひて均齊健かなる輪廓を示し、唐門は桃山建築の遺制を誇る。而して簡樸なる昭堂一種清涼なる室町の禪的風尚を流露す。流石五山の首位應永二十一年火龍天に冲せる厄災に遭難せるも什寶尙多し。その面貌に力を注げる大覺禪師像(絹本着色)着色また濃厚ならずして清逸の趣に充ち、宋末人物畫の作風を明示せる傑作なり。更には巨福建長興國禪寺年中飄經並前住記、宋版大覺禪師

語錄二册、侍者圓顯智光編せる關溪和尚語錄等。旅行者の目を眩すに足るもの多く、今回の行の前途を偲ばしめて、心の躍るを覺ゆ。次に歩を進めて鶴岡八幡宮に詣つ。皇軍將士の武運長久を祈り、目を轉ずれば承久の昔を語り顔なる公孫樹を見る。思ひまどひて往かんところを知らず、數百歩にてその寶藏の綺羅を誇る國寶館に達す。圓覺寺塔頭黃梅院の華嚴塔勸緣疏(瑞鹿山園覺禪寺黃梅院重建華嚴塔勸緣小偈并叙)と題し與に結縁者の署名花押印を列記押捺せる卷(手本)に暫し目を留めて佇立すれば彼方より上杉重房像(木造)われを招く。鎌倉後期の作にしてその面貌の寫實的大局的なる把握は、着用せる直衣の簡潔なる線描的表現と共に、大和繪の肖像畫と軌を一にするものにして、加之充實せる氣魄を包める點、まこと肖像彫刻の傑作なり。初江王坐像、俱生神坐像、地藏菩薩坐像、十大弟子立像(以上木造)十一面觀世音菩薩掛佛(銅造)等敍光を浴びて靜かに塵を積む。繪畫美術工藝品、石造物、武器職具、刀劍の類また擧げて數ふべからず。更に進みて鎌倉宮に詣つ。祭神大塔宮護良親王錦旗を懸し王事に恪勤櫛風沐雨十餘年偏に忠孝の大義を渴させ給ひしに嗚呼逆臣の毒刃に斃れさせ給ふ。雲低うして天涙すれば、わが心隱としておだやかならず、言ふまじく憶ふまじき過去。愁思形なくして雲の如く湧く。

しめれる心に湖南の美景を車窓に送りて稱名寺金澤文庫に至れば、白雲の洋館冷やかに聳立つ。傳へ聞く文明の昔萬里集九杖をこゝに引いて訪書を拒まるとか、思ふべし。

第二日(十八日) 黒田侯爵家、前田侯爵家、維新史料編纂所、

史料編纂所。

早朝黒田家を訪れば我等を待ちて什寶既に廣間に展ぶ。昨日訪ひし金澤文庫の冷きに對比して、其の温情を心から感激する。エトランゼの心は、案外にセンチのものだ。先づ天明四年二月二十三日筑前志賀島より發掘せられし倭奴國王金印燦と輝く。龜井南冥、始めて後漢書「光武帝中元二年丁巳春正月倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武賜以印綬」を引きてその印ならんと唱へて梶原土敬青柳種信これを繼ぎ、亞内いで藤貞幹「奴古目錄」に採録してよりいよ／＼宣傳せらるゝと。乍併、なほ當今學界に諸説あると聞く。大阪夏陣屏風は、先年大城天主閣復興の時に唯一の依據となれるものである。深く謝して長驅駒場なる前田家に至る。楠木正成公自筆「被相加含職之條無相違候、(花押)」の外題を有する楠木合戰註文。天正二十年五月十八日秀吉朱印ある關白秀次に宛てし三國處置太早計。「弘治三年丁巳九月日書寫畢善秀」なる奥書ある水鏡は國史大系本と異りて内容多しと聞く、定家自筆の明月記。鶴岡本貞永式目。卷末に「元和四年三月二十六日於金澤稱名寺書寫並交點畢」とある古語拾遺等々、世に展觀せらる機會少き重寶を、斯くも多數見學し得て兩家の好意に限りなき感謝を捧ぐ。車を轉じて、文部省に維新史料編纂所を訪ふ。藤井先生大塚先生の御説明を、理解への手掛りとして、維新史に關する夥しき史料を拜見、就中珍しきは萬延元年遣米使節歡迎會興村垣龜正紐育にて歡迎せられし時のプログラムの遣米使節歡迎會樂會目錄等を見る。期待せる史料編纂所は時間逼迫のため惶惶辭

彙報

し去れば、やがて山上會議所にしつらへられた東西兩大學交驛のあたゝかき席に着く。平泉教授の歡迎の辭に食卓を圍む。終つて喜田先生を中心に談笑紫烟緩やかに立昇つて興盡きず。兩日種々御教導を賜つた先輩座田、鍋島、吉田、天野諸氏と、惜しき袂を別つて夜行。一路佐渡へ、バトンを次者に渡すべく。(田中章記)
第三日(十月十九日) 佐渡根本寺、妙宣寺、國分寺、相川。

午前八時。佐渡丸に乗り込んだ一行は、米の産地、越後平野を培つて悠々流れる信濃川と、裏日本に於ける特殊な地の利を得て、工業的に、又商業的に飛躍しつつある新潟の町に別れを告げて佐渡へ！ 防波堤を越えて打ち上げて來る日本海の荒波を見て、吾々の顔色も大分怪しくなつて來た。吹える風。大きなうねり。兩津の町が見え出した時は、ホット蘇生の思ひだつた。本間屋で食を終へ、二臺の遊覽自動車を借り切つて、出發した。「おしやれ」の金北山が秋の加茂湖に艶で姿を映して吾々の行を微笑で迎へて呉れ、國中平野を埋めてゐる黄金色の稻田は豊年を壽いでゐる。

文永八年十一月遠流の身の日蓮が凡ゆる困苦に忍へて敢然と法華の教義を説き續けた地、諸宗の僧侶と「塚原問答」を試みたといはれる三昧堂、彼の『開目抄』を著したと稱せらるゝ所。此の塚原に於ける彼の快然たる姿を追想しつゝ、根本寺に詣でた。寶藏では、三昧堂再建の勸進帳、本間六郎左衛門系圖、曆應の日像書狀等を拜見して、次の豫定妙宣寺へ向ふ。

阿佛房妙宣寺 開基日得は、順德上皇供奉の北面の武士で遠藤

左衛門尉爲盛と稱し、後其の妻と共に深く日蓮に歸依して、無二の信徒になれりと云ふ。當寺には日野資朝卿の墓があり。謡曲「桓風」と共に、永く後人の血を沸かせてゐる。此處は都合あつて、歸途再來を約して、國分寺に行く。

醫王山國分寺は聖武天皇の勅願によつて天平中に創建せられたが、平安、享祿の二度の火災に罹り、其の後再建せられたものである。(佐渡志、佐渡國誌)本堂・本尊藥師如來(國寶)は螺髮に後補はあるが、地方には珍らしい傑作で、身長四尺五寸、面長一尺三寸五分、膝巾三尺五寸、衣文には未だ完成せざる藤波式も見られ、がつしりした頬の肉付け、量的な濃厚な感じを與へる盛り上つた胸と腹、貞觀初期の作か。寂光の堂中に仰ぐ古佛の前に吾等は立去るにしのび難い思がする。

同寺の境内には、其の地域二町に及ぶ塔、金堂、迴廊、講堂南大門の礎石が發掘されて居り、草深き中に暫し佇めば、天平の建築は腦裏に紐立てられて、思はず時を過した。

今日一日の豫定も大體終へて、自動車は新町、河原田町二見村を過ぎ、昏れかゝつた七浦の勝景を賞しつゝ、火の色も懐しい相川の町に入つて來たのは七時過ぎであつた。高田屋投宿。

夕食後はアライの散歩に町の情緒を味ふ。今日は相川町のお祭り、太鼓の音も勇しく、神輿は若い衆の肩上に踊り、矛の舞も珍らしい。曾つて相川鑛山に黄金の花が咲いて、人口十萬を算へたと傳へられる昔の傳も、僅かに此の祭に名残を止めてゐるに過ぎない様な氣がして淋しくもあつた。

第四日(十月二十日) 相川小學校、龍吟寺、山本修之助氏宅、眞野宮、順德天皇火葬塚、蓮華峰寺、兩津。

六時起床、七時出發。先づ相川小學校を訪ね、郷土室に陳列せられた舊相川町及鑛山關係資料を校長先生と地歴の先生の御説明で拜觀した。江戸時代の往來物消息往來、應訓往來、諸職往來)鑛山古地圖、役人姓名録、鑛山發掘用具等があり、特に興味深かつたのは、鐵錢座燂出繪圖であつた。

自動車は次の豫定地、龍吟寺に着いたのは八時半頃である。本尊正觀音像(銅造、一尺二寸弱、國寶)は寶髻を大きく束ね、右手は中指と親指を合せて前に向け、左手は伸下して頸を曲げて施無畏の印を結び、古教に富む所が多い。殊に相貌に於ける、少しく上り氣味の目尻、頬の肉付の軟かな感じ、小さい蠶豆形の口の構成する全體の感じは子供っぽい。裳褶の手法は天平的特色を表してゐる。此の像は鎌倉時代に天平彫刻を模刻したとの説もあるが一概にさうも云へまい。天平の特色は至る所に見られるが、或は渡來佛でないかと疑はせる程の異つた要素も入つて居り、研究の餘地の充分に残る優品である。私用で出張中の住職にわざわざ歸つて開帳してもらつた禮を厚く述べて一行は新町に向ふ。

新町の山本修之助氏宅に着いたのは午前十時頃であつた。先代の半藏氏は郷土史家として聞え、蒐集品が多い。特に貴重に思はれたものは、佐渡金山關係記録一卷(繪圖師、山尾衛守定政筆)で徳川時代の金銀採製順序を描いたのである。中に金銀山番所、鍛冶小屋、銅鑪、穿子も見られる。その他、古筆蹟貼交一軸(藤樹、

惺高、道春、祖來、善山、春臺、貼交屏風一双、(惟完、山陽、星殿、北海、粟山、守部、千蔭、白石、眞淵、鳩巢、隱元、季吟)等であり、又半藏氏園分寺陞發掘の際採集せられた瓦は、中央には一寸見られぬもので、様式はシンブリフアイズされて居り、素朴ではあるが極めて珍らしい。

一行は山本修之助氏に案内されて縣眞野宮。(祭神順德天皇、配祀菅原道真、日野資朝)、眞野火葬塚に参拜した。順德院佐渡に流され給ひ、春秋を送り給ふ事廿三年、御壽四十六歳で崩御し給ふた。遺勅により火葬し奉る所即ち之であると。思ひ出しても涙を催すばかりであつた。秋毎に白菊が咲くと云ふ。一花に感あり今更何を忘れ草」

偕て、御陵の前にある茶屋に腰かけ、大佐渡小佐渡に抱かれて靜かに風いでゐる眞野灣を眺めつゝ、晝食をとる。小春日和の暖い光が道端の蒔柿に當つて一句浮びさうな長閑な景色であつた。

吾々の自動車は迂曲の多い山道を登りつゝ、次に變る勝景に迎へられる。又車中の意屈を慰めんとして、佐渡の物語と織り交ぜて唄つて呉れる車堂さんの佐渡おけさは、流石に情緒たつぷりである。アンコールの連続。車は陽氣に走つて、やがて小比叡の蓮華峰寺(新義眞言宗智山派)に着いた。御堂脇の部屋に下げられた繪畫類の中で、足利時代末期の觀音像一幅、絹本着色の不動明王圖や愛染明王圖等があつた。國寶金堂(桁行五間、單層入母屋)の外郭は後補の跡もあるが室町期のものは柱も斗もしつかりして居り、室町初期には此の寺が榮えてゐた事を窺はしめる。奥之院(弘

法堂國寶、寶形造で方三間單層入母屋で茅葺)は破損もあるが、よく整つた瀟洒な建物で室町の建立であらう。弘法大師の御影は貞觀十一年の墨書銘があるが、どう考へても後筆らしい。八角堂及び家康秀忠の廟には、張り付け手法の非常に多くの裝飾が施され、寧ろ煩しい感じをさへ興へる。葵の模様等も一般に悪く崩れて來てゐる。斯る邊鄙な地なるが故に、此の時代迄桃山様式の残つてゐる所に美術史的意義が認められる。

蓮華峰寺を辭して、峠を一つ越した。直ぐ下に小木の町が横はり、海上遠く越後の山々も微かに見え出した。其の昔遊女何百と云はれた程繁華な、佐渡第一の港だつた小木の町も、今は纔かに尾崎紅葉の戀物語を聞かされて親しみを覺える程に變り果て、淋しさうな印象を受ける町だ。

元來た道を展つて、妙宣寺を再び訪ねる頃は既に夕の幕も立ち込めて靜かに暮れんとしてゐた。陳列品中には多くの日蓮上人關係資料があり遠藤氏系圖一卷(鎌足より六郎大夫爲方に至る。奥に別に蕨及學に至る)清原氏系圖(鎌足より秀衡を経て廣時に至る)大久保石見守禁制(慶長九)、本間四郎高滋執達狀等もある。中でも興味深かつたものは天正十七年六月の景勝朱印狀で、徑二寸四分の圓の上に、方六分の角の乗つた朱印が押しであり、虎、龍、藏等の文字がからうじて讀み得る程度のものである。此處には貴重なもの多く時間の不足が残念であつた。

吾々が最後に順德上皇の黒木御所に向ふ頃は、野も山も暮れ果て、月が樹間に上り、寒さうな光を御所陞に投げてゐた。上皇

は此の月の光を眺め給ひて、配所の感を、しみじみ御味ひになり
 どんなに都懐しの念を深くされ給うた事だらう。

御所趾脇に上皇の御念持佛を祀る本光寺に詣で、其の國寶觀音
 像(采造、直立三尺四寸)を拜觀した、像は、眼尻上り、眼の輪廓
 に墨を入れてゐる爲に相貌は少しきつく見える。

衣文には色が少し残り、お姿には京都邊と違つた特色がある、
 全體としては軟かな感を受け、藤原中期の作と思はれる。

茲に佐渡見學の全行程を終へて、兩津に歸り、本間屋に入つた
 のは八時過ぎだつた。今晚は女中さんのおけさ踊りがあるはずだ
 「こいちゃ、こいちゃで二度騙されて」も又來たい程佐渡二日の旅
 は印象的な愉快な旅だつた。(遠藤祐正記)

蒼茫と野暮れ、山暮れ、海暮れて、一日の疲れを泌々と身に覺
 ゆる星明くのみの佐渡の一夜であつた。

第五日(二十一日) 明くれば、夕の星明りに約束された秋日
 和。午前九時、色とり／＼のテープは、船出のドラに打ふるひ乍
 ら、スル／＼と伸びて行く。あるかなしかの秋風にヤンワリと弧
 線を描きつゝ伸びて行く。さらば佐渡よ！ 眞野灣よ！ 國中の
 平野よ！ 歸程百里、又相見ゆるの日は期し難い。船は煙波に霞
 む新潟を目指して、ヒタ走りに走る。行くも、歸るも數々の哀話
 を秘めた四十九里の海路の浪のうねりは、高まり、高まり、遂に
 碎けずに消えて行くのも怪しい。十二時、新潟齋、零時半、再び
 車上の人となる。長岡に於て、公用のため東京に向かはる、西田

先生を御送りして後、數日の御厚情を心から謝しつゝ、他の一行
 は富山市に向ふ。午後九時二十一分。富山齋。

第六日(二十二日) 小雨に明けた二十二日は次第に曇れ上つて
 旅館に程近い富山城趾を訪づれた頃は、麗かな秋日和になつた。

今や濠池、石壘、僅かに其の面影をとゞむるのみ、加賀百萬石支
 藩の豪華は最早偲ぶに由なく、雲白き故城趾の只中には、凡そ似
 つかぬ富山縣廳が巍然として大空を壓してゐる。それより反魂丹
 で名高い師天堂見學、市中見物等、三々五々、自由行動に出る。

午前十時四分、飛騨高地の中心地、高山に向ふ。午後一時一分高
 山齋、先づ高山陣屋を見學。幕府施政の到らぬ隈なきを偲び、更
 に高山國分寺を訪づれた。今は特別保護建造物に編入された國分
 寺堂宇は室町時代の再建にかゝり、桁行五間、梁間四間、南面向
 拜附單層屋根入母屋造りの小宇である。堂前には目通三丈一尺の
 大銀杏が、教權興立一千年の跡を俯瞰しつゝ、黙々と大空に聳え
 立つてゐる。本堂に認められた國寶本尊藥師如來の御姿は、幽玄
 清高限りなく、木彫、座像四尺七寸五分、行基菩薩の座像と傳へ
 られてゐるが、多少問題となす餘地があらう。同じく國寶聖觀世
 音菩薩は木刻、立像六尺六寸、もと國分尼寺の本尊であつたのを、
 國分寺に奉遷せる由、藤原美術の遺芳を傳へて餘蘊ない尤物であ
 る。

折しも、うつろひ易い高地の秋空は、城山かけて雨雲を一杯に
 曇らせたかと思ふ間に、驟雨沛然、車軸を流すやうな土砂降りとな
 つた。一行は慌しく豫定のコースを端折つて、午後二時二十七分發

の列車に飛込まねばならなかつた。間もなく雨は止む。汽車は綠乍らに、寂びまさつた山又山のはざまを縫ひつゝ、ヒタ走りに走る。下呂のいで湯の湯烟りに誘はれて、一夜旅塵を洗はんものと降立つた人々もあつた。本隊の汽車は、軽い旅愁と旅疲れを乗せて、午後二時二十八分、岐阜に着く。東海道線に乘換へ。琵琶湖の淡い水明りは流石に家郷の近きを思はしめて、微かに歸心を煽る。午後七時五十分。京の夜の町は靜かに小雨に烟つてゐた。

(田中勝藏記)

會 報

○評議員改選

昭和十二年度大會(十一月二十一日)において、會則により評議員の改選投票を行ふ。その結果全部留任と決定。

○評議員會

十二月十五日評議員會を開催。會務分擔變更の件に就き議す。

○會員動靜

○入 會

奈良市法蓮町一三一〇

(右岡嶋誠太郎氏紹介)

和歌山市橋町、内町西尋常小學校内

吉田 正男氏

蘭村幸一郎氏

(右米倉二郎氏紹介)
北京米國總領事館氣付

Edwin Reischauer氏

(右稻葉慶信氏紹介)

○轉 居

東京市世田谷區世田谷二丁目一四五五
姫路市伊傳居四五

和田 清氏
小野田 万壽氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄(十二月現在)

新撰北海道史 第二卷第三卷第四卷第七卷

北海道廳

武藤教授在職三十年記念論文集

長崎高商研究館

渡邊幾治郎著 日本憲法制定史講

著 者

史 學 雜誌 四十八ノ十、十一、十二

東大史學會

歴 史 地 理 七十七ノ四、五、六

日本歴史地理學會

社會經濟史學 七十七、八

社會經濟史學會

史 苑 十一ノ二

立教大史學會

史 潮 七ノ二、三

大塚史學會

人類學雜誌 五十二ノ十、十一及附録ノ三

東京人類學會

考古學雜誌 二十七ノ十、十一、十二

考古學會

文 化 四ノ十、十一

東北大文科會

國學院雜誌 四十三ノ十、十一、十二

國學院大學

史迹と美術 八ノ十、十一、十二

史迹美術同友會

經濟論叢 四十五ノ四、五、六

京大經濟學會

社會學徒 十一ノ十、十一、十二

國史學 三十二

史學 十六ノ三

夢殿 十七(推古美術の諸問題)

史淵 十七

臺大文學 二ノ五

青丘學叢 二十八

國民精神文化 三ノ二

史觀 十三

日本文化 十一

東洋史研究 三ノ一

中國文學月報 三十一、三十二、三十三

善隣協會調查月報 六十五、六十六、六十七

歷史學研究 七ノ九、十

哲學研究 二十二ノ十、十一、十二

瓜茄 四

イスラム(回教文化) 一

東洋史會紀要 二

歷史と生活 一

長崎談叢 二十

立正史學 九

中國造營學社彙報 六ノ四
an der Universität, Berlin, 39.

社會學徒社

國史學會

三田史學會

鶴故郷舍

九大史學會

臺大文學會

青丘學會

國民精神文化研究所

早大文學部

天理圖書館

東洋史研究會

善隣協會

歷史學研究會

京都哲學會

奥村伊九良氏

イスラム文化協會

東洋史會

慶應經濟史學會

長崎史談會

立正大學史學會

中國造營學社
Seminar für
Orientalische Sprachen.

Young Pao(通報) 三十三ノ二 ベリオ氏

◎仁和寺 龍安寺 特別展觀目錄の無料頒布について

今回本會大會に際し、仁和寺、龍安寺特別展觀目錄を作製いたしました。同目錄は、京都府囑託、赤松俊秀、時野谷勝兩氏を始め、本學國史研究室の人々の手によつて編纂されたもので一々の出品につき詳細な權威ある解説が附せられて居り、別に圖版として、後醍醐天皇宸翰消息、弘法大師筆三十帖策子の一部(第二十三帖)、龍安寺方丈庭園及同平面圖が挿入せられてゐます。同好の諸賢には何かと御便利かと存じ、尙殘部少々ありますので、左記宛郵税(參錢)同封御申込下さるなれば、無料にてお頒ちいたします。

京都帝國大學文學部内

史學研究會